シルフカンパニー開発記録

鴉仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シルフカンパニー開発記録

【Ｎコード】
Ｎ５６１５Ｎ

【作者名】
鴉仁

【あらすじ】
初代よりも十年以上も昔の記録。ポケモン関連の技術、研究が急速に発展していく中、シルフカンパニーから一つの重大な製品が登場しようとしていた。陰謀、駆け引き、バトルあり。でも、口先が全てかもしれないポケモン小説。　※１話【新たなボール】を公開。製品提案の一幕。

1話【新たなボール】（前書き）

はじめまして、鴉仁です。
この小説はポケットモンスターの二次創作ですが、人間キャラはオリジナルが多数を占め、時代が時代なので登場するポケモンも初代の１５１匹に偏りますのでご注意ください。

少し古い時代のお話を楽しんでいただければ幸いです。

1話【新たなボール】

マサラタウンにて、とある少年が旅立つ日から十年以上も昔の事。
すでにセキエイ高原にてポケモンリーグが発足してから多くの年月が経っているが、オーキド博士によるポケモン１５０種の発表も出ておらず、後の主な発見であるタマゴや新タイプの『あく』と『はがね』の登場はさらに待たなければならない。
現在は道具の生産や開発で確固たる地位を築いているシルフカンパニーも、この時代では群雄割拠の中の有力な一社に過ぎなかった。

ヤマブキシティ、シルフカンパニー本社。数多くの階層、部屋の中でも一定の地位があるものにしか入室する事ができない一室。そこで会議が行われていた。
スクリーンには二つに分かれた球体から、網のようなものが飛び出している様が写されている。それは３Ｄで描画されており、画面の中でゆっくりと回転し、あらゆる方向から図を確認する事ができた。
プレゼンテーション用の映像だが、さしたる役割は無く、見栄えを良くするための演出でしかなかった。
現代からしてみれば貧弱な映像だが、この時代では国内への導入は遅れており、最新の技術を象徴する小道具としては十分な価値があった。
「ボールのハードには合成樹脂を利用します。従来のぼんぐりを利用したものと比較して、本日考案させていただくボールの最大の利点は生産性にあります」
ツカサは目まぐるしく頭を回転させ、自分の言葉を確認した。話題の運び方に何か欠点は無かっただろうか、最初に利点を口にすべきではなかったか。不安な一方で、肯定する思いもあった。最大の特徴は素材であり、従来の『優れた性能』を目指してきたモンスタ

ーボールとは発想が異なるという事だった。
研究が進められている、どんなポケモンでも捕らえるマスターボールとはある意味、対極に位置する製品といっていい。
一人が挙手し、発言を求めた。
「合成樹脂？　ぼんぐりと比べてモンスターボールの素材として、それは優れているのかね」
「はい。まず、モンスターボールに利用できる木の実は限られており、一つの木に実る数も少ない。しかし、その点、合成樹脂は異なります」
質問に対して、ツカサは簡潔に答えた。多くの人間はたいして面白くも無い、専門的な長話など望まないものだ。
「そして、捕獲性能においても決して劣る事はありません。ただし、ぼんぐり特有の特殊な効果は失われますが」
次に二人目が挙手した。ツカサは内心、話が前に進まないなとぼやいた。だが、悪い傾向ではない。質問の数は興味を計る指針になる。たった一言で二人の質問者が出る。それは、彼らに与えた影響を物語っていた。
「合成樹脂ではいけない理由はあるのですか。例えば、安価な金属などでも同様の事が可能だと思えるのですが」
「もっともな見解です。私もそれは考えました」
率直に質問者を称賛すると続けた。
「しかし、いくつかの理由で断念しました。まず、第一に金属は一部のポケモンの住居として適さない事があります。第二に偏見が存在すると言う事。一部の安価な金属は有害であるという風説があります。第三に重量の問題です。人間が常に所持続ける事を考えれば、金属の塊は商品に適さない事が多々あるという事です。これでよろしいでしょうか？」
二人の質問者を納得させると、ツカサは今度は捕獲網、キャプチャーネットの話題に移った。
これもモンスターボールでは最重要部、モンスターを捕らえる機

構の話だった。普通は虫ポケモンの糸や飛行ポケモンの羽を網の素材として利用する。
「やはり、こちらも人工の素材、化学繊維を利用します。この素材ならば大量のポケモンを飼育する必要も無く……」
その他にもポケモンの出し入れ時のエフェクト、開閉の機構などアイディアはあったが、核心部以外はさわり程度に流して、ツカサはプレゼンテーションのまとめに入ろうとしていた。
しかし、その瞬間一人の人物が挙手した。挙手した人物を見て、ツカサは内心身構えた。
モンスターボールにおける開発部門の有力者、フユトラ。今回の提案に対して、否定的な見解を示す可能性が高い人物だった。
「君の提案は非常に興味深い。そして、シルフカンパニーの技術力を持ってすれば、実現する事は十分可能だろう」
一見、好意的な言葉だったが、ツカサは多分に含まれた皮肉の成分を見逃さなかった。
「しかし、だ。要するに君の主張は『質を落とした製品』を売りさばき利益を得る、という事になる」
フユトラは質を落とした製品、という点を不自然にならない程度に強調していた。自分の台詞が効果をあらわしたか確認するかのように、彼は会議室を見回した。
「どうぞ、先を続けてください」
ツカサは穏やかに促した。表面上こそ礼儀正しいが、この状況では「気に喰わなければ、はっきり言え」という事になる。
「低質の製品で利益を得る考えは、消費者を軽視したものだ。また、同じ理由で我が社が積み上げてきたブランドの破壊に繋がり、全体としては社益を損なう」
フユトラの批判はさらに熱を帯び、立ち上がると机に手の平を叩き付けた。
「よって、私はツカサ企画顧問に提案の撤回を要求し、深い反省を求めなければならないと考える」

「おっしゃりたい事は理解しました。もうよろしいでしょうか？
よろしければ着席してください」
「まだ、君の釈明を聞いていないが」
ツカサは心の内で嘆息した。釈明と来たか。意地でも、この提案を悪者にしたいらしい。
「そういう事でしたら、着席したほうがよろしいでしょう」
「私は話をこれだけで終わらせるつもりは無いぞ！」
フユトラの発言を無視し、会議室全体に聞こえるように続ける。
「なぜなら、誤解を元にした弾劾に対して必要なのは釈明ではないからです。それでも、釈明が必要なら一言で済ませましょう。間違っているのは貴方の方です」
烈火の如く怒り、フユトラはツカサの批判を並べ立てたが、ことごとくツカサは聞き流すと一転して厳しく言った。
「もし、私の提案を聞いているのが、あなた一人では無い事を思い出せないのでしたら、今すぐ退室しなさい！　口論で妨害するおつもりですか！」
唐突な変化に面食らったのか、一瞬だけフユトラは舌の動きを止めた。
「フユトラ君。彼の話が終わるまで、矛を収めてはくれないかね？」
ツカサの一言が功を為したのか、それまで沈黙していたシルフカンパニー社長がたしなめた。穏やかだが有無を言わさない雰囲気がある。
「社長がおっしゃるのでしたら」
社長の言葉を聞くと、フユトラは沈黙して着席した。しかし、その厳しい視線に変化は無かった。
「それでは、誤解を解くことから始めましょう」
控えめな様子でツカサは反論を始めた。もちろん、控えめな態度で臨んだ方がフユトラが大人げなく見えるという計算もある。
まず、落としたいのは質ではなく、価格であるということ。
僅かに質が落ちたとしても、正しく情報を公開し、値段を落とす

事で消費者に対する十分な還元が行えること。
その他の多くの批判は、この提案が不実なものであるという誤解の上に成り立っており、まったく当てはまらないこと。
ツカサは的確にフユトラの批判を否定していった。
「それに子供に買い与える親の立場としては、値段が安いという事は重要な指針になるのではないでしょうか？」
子持ちの社員達が何人も苦笑したのを見て、ツカサはこの冗談で反論を終え、まとめに入る事を決めた。
「さて、シルフカンパニーの目的は利益追求でしょうか？　それとも、社会や消費者に対する貢献でしょうか？」
ツカサは会議室全体に呼びかけた。
声は低かったが、口々に意見が述べられた。聞こえる限りでは、どちらをより重視するかは、どうやら半々と言ったところらしい。
「答えはもちろん、その両方です。貢献が利益に繋がり、利益がより良質の貢献に繋がっていくのです」
ざわめきが止まった。会議室の人間の多くがツカサに注目している証だった。頃合とみたツカサは結論を下した。
「この提案もその一環である事を私は確信しています。誰でも手に入れることが出来る安価で良質なボール。それが、多くの消費者とポケモンリーグからの支持に繋がり、シルフカンパニーのシェア拡大において有益となるでしょう。その点も踏まえて、この提案についてお考え下されば幸いです。以上、プレゼンテーションを終了いたします。ご清聴ありがとうございました」
ツカサによる企画提案は本人の礼と、多くの拍手によって締められた。

「顧問！　プレゼンテーションはどうでしたか？」
「いかがでしたか、でしょう。もう少し、君は丁寧語ではなく敬語に慣れるべきですね」
会議を終え、彼本来の職場である企画室に戻ると秘書に話しかけ

られ、ツカサは苦笑した。
「それで、いかがでしたか？」
重ねて問われる。室内の全ての人間が自分に視線を注いでいる。ツカサは秘書が社員達の代表者に過ぎない事を悟った。
「とりあえず、我々の提案が一番印象に残ったのは確かです」
前置きをしてツカサはプレゼンテーションの様子を詳しく語って聞かせた。
コスト軽減と生産性を中心に話した事、多くの人の興味を引いた事、開発部門のフユトラから反発を受けた事、最終的には好評の内に終えられた事。
「おそらく、みんな良い印象を受けたでしょうし、通るとしたら顧問の企画でしょうね？」
特に若い社員の一人が目を輝かせて言った。それに対して、ツカサは少し表情を曇らせて肩をすくめた。
「さて……我ながら有力だったとは思いますが、正直言ってフユトラ氏にうまくしてやられたかもしれません」
「なぜです？　提案の途中に逆上するなんて、良い印象があるとは思えません」
「彼はおそらく、本気で逆上したわけではありません」
ツカサはプレゼンテーションとは異なり、気楽に淡々と解説を始めた。
「筋の通った意見を言うより、理想を持つ熱血漢と利益だけを求める冷血漢の構図を作りたかったのでしょうね。一部の体育会系的な方々は、意見の良し悪しを無視して前者に好感を持ってしまう事が多いのでね」
「そんな、無茶苦茶な……」
仕事の場に個人的な好き嫌いを持ち込む、重要な提案の場でそんな事をする人間が居るとは、若い社員には納得しかねる事実だった。
ツカサは軽くたしなめる事にした。
「そういった現実も踏まえなければならないのがプレゼンテーショ

ンですし、社会というものです。誰もが冷静かつ懸命にならなければならない、という考えは傲慢の見本ですよ」
もっとも、ツカサは価値観の多様性という言葉に幻想を抱いていなかったので、そういった人物に対しての評価は辛い。
個性という言葉に言い換えても、害になるものは害だし、劣っているものは劣っているのだ。現実をありのままに見て、そのうえで考え抜いて対処するのがツカサのやり方だった。
例えば、感情的な人物からも共感を得るために、提案のまとめで理想論を熱心に述べる、といった技法だ。
「人知尽くして天命を待つ。やるだけの事はやったはずです。この件については受け入れられるか蹴られるかするまでは、もうすべき事はないでしょう」
いつのまにか話を聞くために集まっていた社員を解散させると、平行して行われている商品改善の提案について何度かアドバイスをし始めた。
他の職務に精を出しながらも、何度かモンスターボールの企画の事が頭に過ぎる。
（もしかしたら、フユトラ氏や開発部門の説得が必要になるかもしれませんね）
ツカサは特に理由も無く、多難な前途がある事を予感していた。

1話【新たなボール】（後書き）

ポケットモンスターの話なのにポケモンが出てこないという。
企業が舞台ですが、あまりリアルではないので話半分に受け止めておいてください。
まだ開発には至っていませんが、それは今後の楽しみという事で。

登場人物
ツカサ……シルフカンパニー企画顧問。
フユトラ……シルフカンパニー開発部門の有力者。
社長……シルフカンパニー代表取締役。
主な職務はプレイヤーにマスターボールを渡す事。

今のところは十話完結を予定しています。
次回は2話【職人の心】。
提案は好意的に受け止められたものの、サンプル開発までにはある障害が……

2話【職人の心（前編）】

好感の持てる怜悧さ、決して独りよがりになる事がない知性。それがツカサ企画顧問に対する人物評だった。

といっても、彼の風貌はいわゆる学者肌の人間の典型というわけではない。痩せてはおらず、眼鏡もかけていない中肉中背。容姿に特筆すべき要素はなく、せいぜい若くて仕事に慣れ始めた世代の社員程度の印象しかなさそうなものだが、落ち着いた挙動や明晰な言動が彼の実力を裏付けている。

ツカサは年齢のわりには高い地位にあるが、企画顧問とは名前だけが物々しい名誉職に過ぎなかった。

シルフカンパニーの社内で出される様々な提案について、意見を述べるだけの役職であり、本来ならば能動的な権限を何一つ持たない役職でもあった。

それにも関わらず、有力者が集う会議に出向き、重要な提案を行うことができたのは、ひとえに企画部門の信任を得て、代表者として推薦されたからだ。

逆に言えば、権限ではなく人望に頼らなければ人が動かせないというのも確かだった。

「おはようございます」

朝日が差し込み、室内では情報交換や意見交換が絶えず、やや散らかっている事が多い企画室。

ツカサが馴染みの職場に出勤し、それを迎えたのは一つの吉報だった。

「おはよう、ツカサ君。以前に君が発表した提案の話だが……」

「以前の提案と申しますと、あのモンスターボールの事でしょうか」

ツカサは会釈を返しつつ、親しげに話しかけてきた課長、ミチオに問い返した。

本社における企画部門の課長は、話好きの中年男性で性格も頭も

悪くない。多くの同僚と同じくツカサもミチオには自然と好感を持っていた。
「そう、それだ。君の提案は好意的に受け止められたらしくてね。サンプル開発に向けて、詳しいモンスターボールの仕様と量産化における計画を用意してもらいたい。期限は、まだ特に設定されていないと思うが早ければ早いほどいい」
「まかせてください。すでに大まかな所は用意してありますので」
自信を持ったツカサの返答に、ミチオは苦笑したようだった。
「量産化の計画については、素材の確保が主眼が置かれるだろうし、ボールの仕様については開発部門に話を通しておくべきだろう」
「素材確保については複数の伝がありますので、実用に足るかどうか確認をお願いできますか？」
「それは構わないが、開発部門の事についてはどうする？　どうも、フユトラさんの反発を買ったらしいし、彼に同調する者も少なくないだろう」
それが課長が苦笑した要因らしかった。確かに痛いところをつかれ、ツカサは表情を翳らせ肩をすくめた。
「……仕事の話ですよ。会社の一員として例の企画のために動くのですから、彼らも好悪の感情を差し挟んだりはしないでしょう」
「まあ、手を抜く真似は決してしないだろうが、今後どこで悪影響があるかは分からんだろう。亀裂の修復は引き伸ばして良い問題じゃないぞ」
あまり似合うとは言えない厳しい口調でミチオは指摘した。
ただし、その筋が通った発言はツカサをうなずかせるには十分なものだった。
「分かりました。今日中に話をしてみましょう」
「こういった場合の率直さは君の美点だな。おーい、ユキコ君！」
ツカサの返答を聞くと、ミチオは大声で女性秘書の名前を呼んだ。
女性用のスーツに身を包み、髪は首にかかる辺りで切られたセミショートだが、化粧は薄く敏腕秘書といった印象とは無縁で、まる

で制服を着た学生のような外見だった。
　ユキコと呼ばれた秘書は、ちょうど手が離せない社員に緑茶を差し入れる途中だったが、自分の名前が呼ばれるのを聞くとさっさと緑茶をそこらに置いて、元気よく返事をした。
「はーい、どうしましたか、課長」
「あ、いや緑茶は取り合えず渡してからでいいかな」
「間延びした返事も良くありません。それに敬語を覚えなさいと、何度言ったら……」
　両者とも、それぞれ呆れた様子で眺めていた。しかし、この秘書は抜けた所はあっても無能ではなく、むしろ有能な所があった。
　まず、企画部門の秘書なだけあって重要書類の類は正確に管理していたし、社員の世話やその他、企画部門で求められる独特の雑務を訳無くこなしている。
　ただし、来客の世話や電話対応だけは決してやらせてはいけない、という認識も持たれていたが。
「渡してきました。それで、用件は……」
「ですから……」
「ツカサ君、企画部門の内輪の事だし、この際、細かい事は気にしないで置こう。第一、いちいち気にしていたら話が進まんだろう」
　有益な忠告だった。ツカサは諦めた様子で口をつぐむと、課長の言葉の続きを待った。
「今日中にツカサ君が開発部門の人間と話し合いたい事があるので、予定を調べて段取りをつけて欲しい。相手はフユトラ氏と部長でいいかな？」
「いえ、管理職より現場の反発ですし、部長よりも本部課長の方と話し合いたいですね」
「では、フユトラ氏と開発部の課長だ。今の所、差し迫った仕事は無いし、これは最優先で頼む」
　ミチオからの指示にユキコは調子外れな様子で何度か頷きを返した。

「それでは、まずツカサ顧問の予定ですが……」
「この課題より優先すべき仕事は無いですよ。もともと、暇な職務ですしね」
「はい、そうですね！」
自嘲気味の言葉を、なぜか元気良く返され、ツカサは思わず肩を落とした。
ツカサの予定が特に無い事だけを確認すると、ユキコは慌しく企画室から退出していく。上司の目前だというのに失礼しますの一言も無しだ。
それを見たツカサは、ため息交じりに呟いた。
「大丈夫ですかね」
「ああ、それよりも心配しなければならないのは、君の話し合いの事だろう」
ツカサと同じく秘書に対しては呆れ気味のミチオだったが、能力の欠如を心配してはいなかった。
「それにしても、なぜフユトラ氏の反発を買ったのかね？　あの提案なら開発部門にとっても、やりがいのある仕事であったし、興味深くも思えただろうに」
「たとえ、必要であっても妥当であっても、モンスターボールの捕獲性能を落とさなければならない事に反発したのでしょう。製品の質とは、決して捕獲性能だけでは無いし、トータルの質を落とす気はさらさら無いのですが……」
推測しつつも先日のプレゼンテーションでのフユトラの反発を思い出す。
おそらく、彼はシルフカンパニーの製品を自分の作品として捉えているのだろう。もちろん、開発に携わる人間は多かれ少なかれ、そういった感覚を持っている人間は多いし、それは作品の良質化にも繋がる。
しかし、質ではなく量や価格を個性として、作品ではなく製品に徹した品を作る場合は話が異なってくる。開発の過程では技術は必

須であっても、最終的には彼らのアイデンティティーを奪いかねない一面があった。より優れた製品の開発のために尽力しているのに、会社の方針が質などよりも安く、となってしまっては立場が無い。
「なるほどな。たしかに彼ならそういった反発をしてもおかしくない。そして、これまでは確かにその拘りがシルフカンパニーにとって有益だった」
「これからも、大抵の場合は有益ですよ」
ツカサとしても、そういった方向に会社が舵を切る可能性を懸念していないわけではない。
しかし、それ以上に誰でも手に取れるボールが必要であるとも考えていた。シルフカンパニーが今後も成長し拡大していくためには、ポケモンの捕獲や飼育を盛んにして市場を広げなければならず、地方規模の大会社になるためには市場拡大の主導権も握りたい所だった。
「ただ、フユトラ氏達には少し職人魂というものが、時として足かせになる事を理解して欲しいのです」

強化ガラスで囲まれた檻の中、長く伸びた前歯が特徴的なねずみポケモン、コラッタが落ち着かない様子で歩き回っている。
檻の外で研究者が鍵盤を操作すると、装置からコラッタに向けて白い網のようなものが射出された。
人間の腕力で投げたとき以上の速度で網はコラッタの頭上に到達すると、広がり覆いかぶさる。
「さて、ここからだが……」
研究者が独り言ちた。キャプチャーネットの素材の選定と情報記録、それがこの実験の主目的だった。
網に捕らわれたコラッタは暴れだし、たちまちその前歯で網を食い破ってしまう。しかし、その網は粘着性を持っており、たとえ食い破られても、暴れれば暴れるほどコラッタに纏わりつく。やがて、コラッタは毛糸球のような姿になり動けなくなってしまう。

それを見た研究者の表情は動かなかった。実験は予想通りの結果しかもたらさなかったのだ。
「やはり、キャタピーの糸は耐久性に欠けます。粘着力は捨てがたいですが、それに頼れば量で勝負する事になります」
研究者はコラッタから目を離し、厳しい面持ちの男に向かって振り返った。
「この素材をさらに強化するというのは、現状難しい話ですよ、フユトラさん」
「だが、キャタピーの糸はある条件で極めて頑丈になるケースがある。その条件さえ解明できれば……」
フユトラはツカサ顧問からすれば親の世代にあたる。頭髪に白いものが多くなり、顔にもしわが出来つつあるが、それでも心身共に頑強な印象を与える。
彼はシルフカンパニー本社が存在するカントー地方の隣、ジョウト地方の出身だった。さらに特別な経歴として、モンスターボール職人出身である事が挙げられる。若い頃に厳しく高名な師に師事し、肉体的にも精神的にも鍛えられ、やがてそれは師にも認められ技術を授かった。
特に優れた弟子の中でも、ある者はジョウトに残り職人としての道を歩み、フユトラはカントーに訪れ、自らの技術を広く活かす事を望んだ。
フユトラは自らが選んだに道に後悔は無かったが、ボール職人としてひたむきな生涯を送る事にも憧れはあった。
「たしかフユトラさんは例の提案には反対の立場をとっていましたね？」
次に実験に使う素材を吟味しつつも、研究者はフユトラに尋ねた。
「そうだ。それがどうかしたか？」
「いえ、ただ理由が気になりまして」
フユトラは無愛想な目で研究者を見返した。研究者はツカサの提案にある程度の興味を覚えているらしかった。

「私はシルフカンパニーに入社して以来、今日までボールの性能向上のために尽力してきた」
「ええ、開発部門に知らぬものはいませんよ」
研究者は唐突な言葉に面食らったが、問い返さずに素直にうなずいた。
「そして、性能向上を止めるには早すぎるとも思っている。あの男はシルフカンパニーを、ただの量産工場に変えかねない提案を出したのだ」
「なるほど……その危険性は考えませんでした。しかし、それが社の利益になると言われれば反論は難しいでしょう」
フユトラは苦虫を噛み潰したような表情になった。
「ツカサ企画顧問がその事について話があるそうだ。午後に私と彼と開発課長で会談する」
「話し合いを、お受けになったのですか？」
「あくまで仕事の話だ。受けん訳にはいかんが、少し趣向を凝らす事にした。ツカサ顧問がどの程度、分かっているのか楽しみだ」
あえて対象を省いた物言いをすると、フユトラは堅苦しい顔立ちに意地の悪い笑みを浮かべた。
質をとるか、量をとるか議論するならば、両方を取るという最善の選択も存在する。そんな事はフユトラにも分かっていた。おそらくはツカサが最後の答えを取ろうとしている事も。
しかし、『職人』と呼ばれる人種がいる事を考えても、モンスターボールの製作は伝統工芸に近く、食品や家電などと同じ括りで考える事はできない。
悪い事に職人の技術が美術的価値でなく、性能に強く関わっているのだから、質の下落が道具として無価値になる事に直結する。
モンスターボールの開発においての体質変更は、多々の繊細な問題を孕んでいる。
フユトラはツカサはどの程度、そのことを知っているのか疑問だった。

2話【職人の心（前編）】（後書き）

予想外に文章量が増えたので、前後編という形で公開する事にしました。

名前が登場したポケモン達はマサラタウン～トキワの森から抜擢。

レベルが低く、捕らえやすい連中という事で。

追加の登場人物紹介は後編のあとがきで行わせていただきます。

次回は【職人の心（後編）】。

開発部門からツカサに、とある賭け事が持ちかけられるが……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5615n/

シルフカンパニー開発記録

2010年10月8日14時13分発行